

吉野町国栖周辺地域は、故事をたどれば天武天皇の御代にまで遡るほど歴史の深い手漉き和紙の産地である。

山からじかに下りてくる吉野川の水は澄み切って凜と輝いている。まさに「山紫水明」の言葉がそのまま当てはまるような里だ。そんな川の流れを見下ろす高台に和紙の工房がある。

「このきれいな山谷の水と楮、ノリウツギという植物、そして吉野でしか取れない白土を使って一緒に混ぜて漉いたのが：今は『宇陀紙』ですけども、もともと私たちは『ナミジロ』と呼んでいました。言葉の由来は定かではありませんが、生漉きの紙は餛飩色をしているのに対して、この土によって紙の色が白くなるから、そう表現したんだと思います。これが表具の裏打ちに欠かすことのできない吉野独特の手漉き和紙なんです」

どちらかという和华奢な印象、そしてやわらかな物腰で語る福西さんだが、その経歴は枚挙に暇がない。

まず、昭和二〇年に家業の手漉き和紙業に従事。そして昭和五三年に文化庁より宇陀紙保存技術保持者に認定されて以来、今日まで吉野伝統の和紙である宇陀紙の技術や保存の指導的な立場として、文化財修復用和紙の製作の

ほか和紙に関する講演・啓蒙活動等が認められ、平成十二年には勲五等瑞宝章を授与されている。

今回、やまとびとインタビューでは二号にわたって福西弘行さん特集させていただくことになった。

まずは福西さんがこれまで歩んできた道程について語っていただいた。

### 山紫水明

「私が小学校の時分は、このあたりは国栖郷（くずごおり）と呼ばれていました。当時はこの地区全体で二〇〇軒余りが紙を漉いていて、村役場の財政が漉き屋の稼ぎで賄えたといえます。当時は、ほとんどの漉き屋が五月ご

ろから蚕を飼っていました。年に春・夏・秋と三回、蚕をやって一〇月の終わりごろには最後の繭がさがります。だいたいこの辺りではどこの家も紙漉きと蚕をやっていて、十一月には繭が一段落するので冬になると紙漉きに変わりました。

子どもの頃、私も夏になると「おじいさんが桑畑へ草削りに行ってるから手伝ってこい」と言うわれたものです。蚕を飼っている漉き屋はみな休みなしでした」

紙漉きに従事する職人が毎日休みなしに働かなければならなかった理由のもうひとつに、吉野の和紙製法の特徴があったという。当時は今のよう大

